

『バナナの世界史』

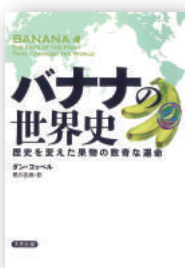
～歴史を変えた果物の数奇な運命～

最近、新パナマ病というバナナの病気が蔓延し、バナナが絶滅の危機に瀕している、というショッキングなニュースを耳にしたことはないでしょうか。正確にはバナナ全体ではなく、「キャベンディッシュ」という一つの品種が絶滅の脅威にさらされています。

驚くことに、日本でも米国でも熱帯産のバナナがリンゴなどの国産の果実より多く食べられています。消費されているのは、ほとんどがこのキャベンディッシュです。ドールやデルモンテといった多国籍企業が、中南米やフィリピンに開発した広大なプランテーション（農園）で栽培し、ほぼすべてを欧米や日本に輸出している、いわば「グローバルなバナナ」です。そのため、キャベンディッシュの危機は、先進国の消費者にとって深刻な事態です。

種がなく、株分けで増える単一クローン植物であるバナナは、いったん病気にかかるとその拡大を防ぐのが非常に困難です。一方、熱帯地方では千種類以上の「ローカルなバナナ」が、古くから日常的に消費されています。「ローカルなバナナ」も新パナマ病にかかる恐れはゼロではありませんが、被害はその地域に限定されます。病気の蔓延は生物多様性を軽視し、経済的効率を追求した結果、起こるべくして起きた事態。本書はそうした視点を私たちに与えてくれます。

小林和夫(こばやし・かずお /ATJ)



ダン・コッペル 著
黒川由美 訳
(太田出版 2012年)



特定非営利活動法人 APLA (Alternative People's Linkage in Asia)
フィリピン・ネグロス島での20年以上の経験を活かし、「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。【HP】<http://www.apla.jp>



株式会社オルター・トレード・ジャパン(ATJ)
パラゴンバナナやエコシュリンプなどの食べ物の交易で、生産者と消費者を顔と顔の関係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。【HP】<http://altertrade.jp/>

過去のニュースはこちらからご覧いただけます。
<http://www.apla.jp/archives/publications-cat/ptop>

人から人へ

2017.3 vol.12

人から人へ
特定非営利活動法人 APLA/あぶら(株)オルター・トレード・ジャパン(ATJ)
〒169-0072東京都新宿区大久保 2-4-15 サンライズ新宿3F
TEL:03-5273-8160 FAX:03-5273-8667 E-mail:info@apla.jp



畑を見回るジェイクさん

5人兄弟の長男であるジェイクさん。第一印象は寡黙な印象でしたが、仲良くなるとよく話す青年です。2人の弟と妹がいて、母親は専業主婦、父親はゴルフクラブで働いています。ラサール大学でオペレーション・マネジメントを勉強し、卒業後は広告代理店で働いていました。

オルター・トレード社(ATC)の掲げる農村地域の貧困撲滅、零細農家のエンパワーメント、生産者と消費者の連帯を築いていくことを目的としたオルタナティブな事業体というビジョンに共感し、ATCに転職したのは2015年1月のことです。

最初はサトウキビ産地をサポートする部署に配属され、資金管理を担当していました。その後異動し、現在はマーケティング & セールス部でTheBoxを担当しています。TheBoxとは、ATCがつながっている生産者・産地からパラゴンバナナ、サトウキビ以外の農産物を買ひ、バコロド市内を中心とした消費者に届ける宅配事業です。日本の生協の仕組みを参考にして、2013年にATCが立ち上げた事業です。

現在は、野菜、果物、鶏肉、卵など80品目以上を扱っており、毎週20人以上の消費者に届けています。TheBoxの仕事の難しさは、消費者からの

問い合わせやクレームに対応していくこと、品質のいい状態で品物を届けること。また、TheBox 利用者に生産者の現状をより理解してもらうため、2016年7月9日には、産地での交流会を実施しました。生産者と消費者がお互いに話し合う良い機会になり、交流会後は消費者からのクレームも減ったそうです。

ジェイクさんが仕事にやりがいを感じる瞬間は、利用者が届いた品物に満足してくれた時やただの青果物の買取りではなく、生産者と良い関係を構築でき、生産者が笑顔になってくれた時だといいます。

キリスト教徒であるジェイクさんは、日曜日や祝日は教会に行き、休みの時はバレーボールやバスケットボールをすることが好きです。副業として養鶏を営んでいるので、鶏の世話もしています。また、時間がある時には畑に行き、農業もしています。

フィリピン国内でも少しずつではありますが、消費者と生産者の関係が構築されつつあります。その大事な架け橋を担っているジェイクさんはまさに「縁の下の力持ち」!

黒岩竜太(くろいわ・りゅうた /ATJ)

ジェイク・ケビン・セルデニヤさん
(フィリピン /ATC)

● 民衆交易を陰で支える現地の方々をご紹介します。
縁の下の力持ち



未曾有の大干ばつからの復興へ ～バナナ産地ミンダナオ島ツピ～

フィリピンで過去にない大干ばつが発生

2016年、フィリピンの乾季(12～5月)と大規模なエルニーニョ現象とが重なり、フィリピン全土が干ばつおよび高温に見舞われました。フィリピンの南部に位置するミンダナオ島のツピはバラゴンバナナの産地の一つですが、特に被害が大きかった産地です。

干ばつの影響を受け、バラゴンバナナの生育は鈍化し、生産性が著しく低下しました。通常よりもバンチ(房の連なり)が小さく、日本への出荷基準に満たない細いバナナが増えた結果、バラゴンバナナの出荷量は約8割減少してしまいました。バラゴンバナナ以外の農作物も被害を受け、多くの生産者が苦しい生活を強いられました。「過去にも干ばつは経験しているが、今年のようなひどい干ばつは初めて」と多くの人びとが口にしています。



待ち望んだ雨、そして復興へ

2016年5月末、待ち望んだ雨がようやく降り始め、生産者は鶏糞などの施肥、そして株の植え替えなど、畑の状態の回復に努めました。施肥や株の植え替えのために、日本からも支援金を送りました。

「施肥することで、バラゴンバナナの成育がよくなる。日本の皆さまからの支援があって、干ばつ被害からの回復を早めることができた」と話すのは、生産者のアルバート・バラソさん。2016年6月に訪問した時は、水不足で親株が弱り、実がなりそうもない状況だったため、親株を切り倒して次の世代(脇芽)に栄養を回していました。2017年2月に再びバラソさんの圃場を訪問したところ、バラゴンバナナは順調に育っており、収穫量も増えていました。

ツピでは、干ばつが過ぎた後も雨季にバナナの病害が出たり、突風でバナナが倒れてしまったりと、干ばつからの復興は一筋縄ではいきませんが、生産者たちのがんばりでツピからの出荷数量は少しずつ回復してきています。また、干ばつ後に植えたバラゴンバナナも順調に育っており、実を付け始めています。



ツピのバラゴンバナナ生産者、アルバート・バラソさんの圃場。写真左は2016年6月、右は2017年2月の写真。脇芽が順調に育ち、実をつけてきている。

生産者たちの誇りと育まれる平和

ミンダナオ島は、バナナ、パイナップル、ゴムなどといった多国籍企業の大規模プランテーションが広がっている島です。多国籍企業のパイナップルのプランテーションがあり、パパイヤやバナナの契約栽培も盛んなツピは、インフラが整備され、区画整理もされています。そのような地域で化学合成農薬・化学肥料を使わないバラゴンバナナ栽培は、行政に高く評価され、出荷責任団体であるTUBAGA(ツピバラゴン生産者協同組合)は様々な賞を受賞しています。そのことがツピの生産者にとっての誇りでもあります。



ツピの住民は、ルマドと呼ばれる先住民族、モロと総称されるイスラム教徒(ムスリム)、多数を占めるようになったキリスト教開拓民*で構成されており、土地所有概念の相違から、ムスリムを含む先住民族と新規移住者の間で土地をめぐる紛争が激しかった地域でした。しかし、キリスト教徒が中心に始めたバラゴンバナナ民衆交易は、生産者協同組合の意向でムスリムの人たちにも参加を働きかけ、民族・宗教関係なく協力してバラゴンバナナの仕事に関わっており、生産者以外にも200人程の雇用も創出されています。

ツピの生産者で、キリスト教徒のマルロさんは、「昔はムスリムに対する偏見を持っていて、なかなか打ち解けられなかった。バラゴンバナナ民衆交易を通じてキリスト教徒とムスリムと一緒に働き、ムスリムに対する偏見がなくなった。バラゴンバナナは、ツピの平和構築にも貢献している」と言います。

少しずつ干ばつ被害から復興へ向かっているツピ。大きな被害を受けましたが、多くの生産者はこれからもバラゴンバナナ栽培を続けていくと話しています。今後大きな天候被害がなく、順調に復興へと向かうことを望んでいます。

黒岩竜太
(くろいわ・りゅうた/ATJ)



*フィリピン中央政府は、ルソン島やビサヤ地方(ルソン島とミンダナオ島)の間に広がる島群からキリスト教徒の移住政策を推し進めた。ミンダナオ島は肥沃な土壌が広がっていたため「約束の土地」と呼ばれた。